

A Way of Life

—Seko Koichi—

18号

平成26年9月

世耕弘一先生建学史料室広報

世耕弘一先生の山岡萬之助先生宛 一九二三年十一月二日付書簡（ベルリン発信）について

近畿大学名誉教授・建学史料室研究員 荒木 康彦

1

山岡萬之助（一八七六—一九六八）

先生（以下、山岡先生と略す）は、

周知のごとく、世耕弘一先生（以下、

世耕先生と略す）の日本大学での恩

師であり、「日本大学留学生」¹として

の世耕先生のドイツ派遣決定に関

わった人物と目される。ここで先ず

山岡先生の略歴の一端に触れば、

以下の通りである。山岡先生は日本

大学の前身たる日本法律学校を卒業

し、判事、さらに検事となつて敏腕

を振るい、在独研究（ライプチヒ大

学で法学博士の学位を取得）を経た

後は、司法省参事官・同省監獄局長・

同省刑事局長などの頭職を歴任し

た²。他方、山岡先生は公務の傍ら

で日本大学に出講し、明治四三

（一九一〇）年には日本大学教授と

なり、大正二（一九一三）年に同大

学学監、同五年に同大学理事、同

十二年に同大学学長となり、昭和八

（一九三三）年から同二十一年までは

同大学総長を務めた³。そのため、

世耕先生の御業績を考究する上で

も、近畿大学の前身である大阪専門

学校・大阪理工科大学の歴史を探究

する上でも、日本大学の中心人物と

しての山岡先生に関する史料の調査

は、避けて通ることが出来ない。学

習院大学法経図書センター所蔵の

「山岡萬之助関係文書」（山岡先生の

令孫による寄贈）には、約三〇〇〇

点にも及ぶ史料が収録されている。

同センターに赴いて、これを精査し

た結果、右に述べたような意味で非

常に重要な一次史料を発見して採取

することが出来た。その中でも特筆

すべきは、世耕先生がベルリン留学

中に山岡先生宛に発信された、以下

の四通の書簡である。

① 一九二三年十一月二日付書簡

（「山岡萬之助関係文書」での

整理番号HT2）

② 同年十一月十九日付書簡（山

岡萬之助関係文書」での整理

番号HT3）⁴

③ 一九二四年十月十日付書簡

（「山岡萬之助関係文書」での

整理番号HT4）⁵

④ 同年十月十一日付書簡（山

岡萬之助関係文書」での整理

番号HT5）⁶

ベルリン留学中の世耕先生の御動

静を伝える一次史料は、従来未発見

であっただけに、この四通の書簡を

発見出来たことは、その意義が頗る

大きいと言える。先般、この四通の

書簡を解読することに成功し、発信

当時のドイツの歴史的状况を踏まえ

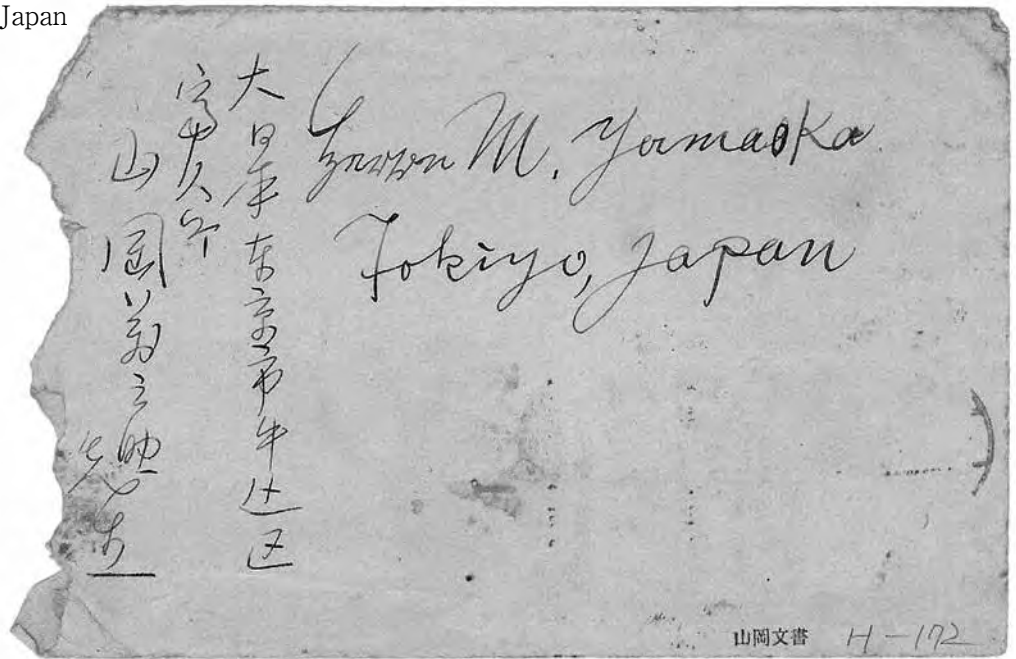
て、それら夫々の内容を内在的に解明することも出来たので、先ずもつて、本稿では①の書簡を取り上げることにした。最初にこの書簡の複写を、次いでその解読文を掲げ、さらにこの書簡の要点について、関連史料を活用しながら、実証的に聊か論究したく思う。

①は世耕先生がベルリン到着の約二週間後に発信されたもので、その内容からして山岡先生宛ベルリン発信の最初の書簡であり、しかもドイツを襲った未曾有のハイパー・インフレーションが猖獗を極めていた時期のものである。この書簡の封筒は縦約十一・二センチ、横約十六・四センチ、約十八・三（左端が千切られて開封されており、本来の横幅はもう少し大であろう）であり、便箋は縦約十九・五センチ、横約三・一センチで、表面の冒頭部に「(1)」、裏面の冒頭部に「(2)」と記され、夫々の面に通信文が書かれている。当時のドイツの経済状態を反映して、封筒も便箋も紙質はあまり良くなく、文字は青インクを用いてペンで記されている。封筒の表面の右下に切手が貼付されていたようであるが、これは失われている。

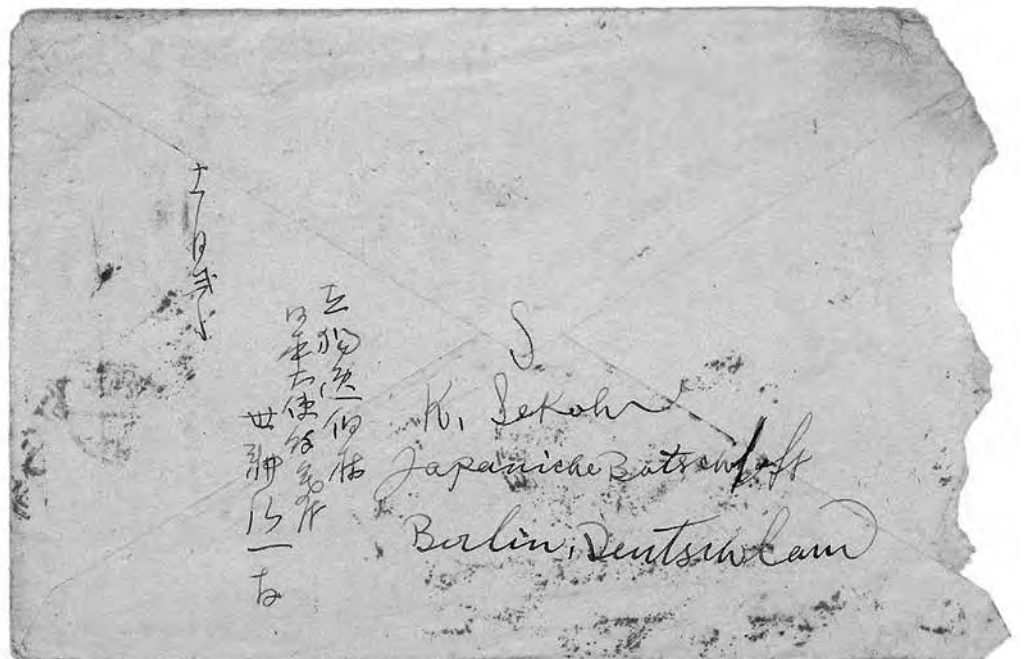
以下、先ず封筒の表面・封筒の裏面・便箋の表面・便箋の裏面の複写とそれぞれの解読文（出来るだけ原文通りにしている）を掲げ、しかる後にこの書簡の持つ意味に些か触れてみたい。

大日本東京市牛込区
 富久町
 山岡萬之助
 先生

〔封筒の表面〕



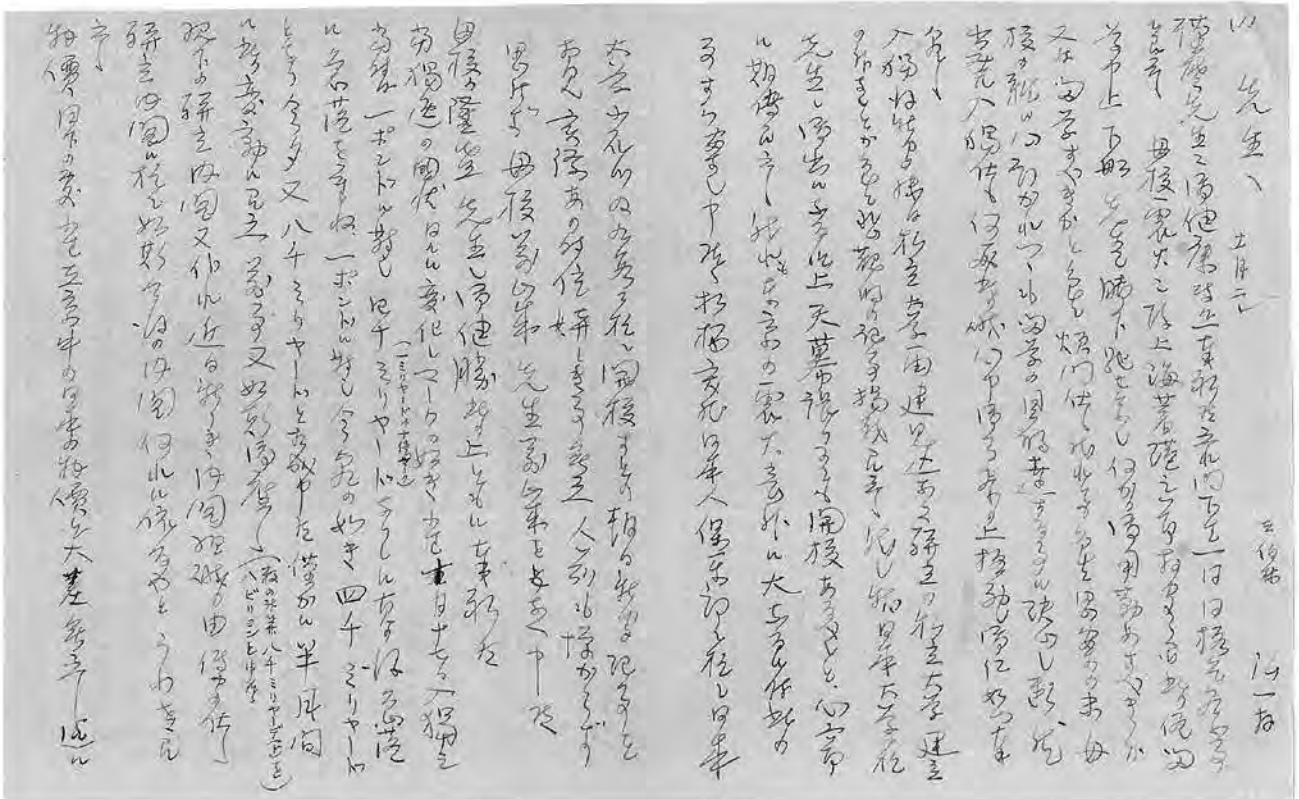
〔封筒の裏面〕



十一月 式日

在獨逸伯林
 日本大使館氣付
 世耕弘一 拜

K.Sekoh
 Japanische Botschaft
 Berlin, Deutschland

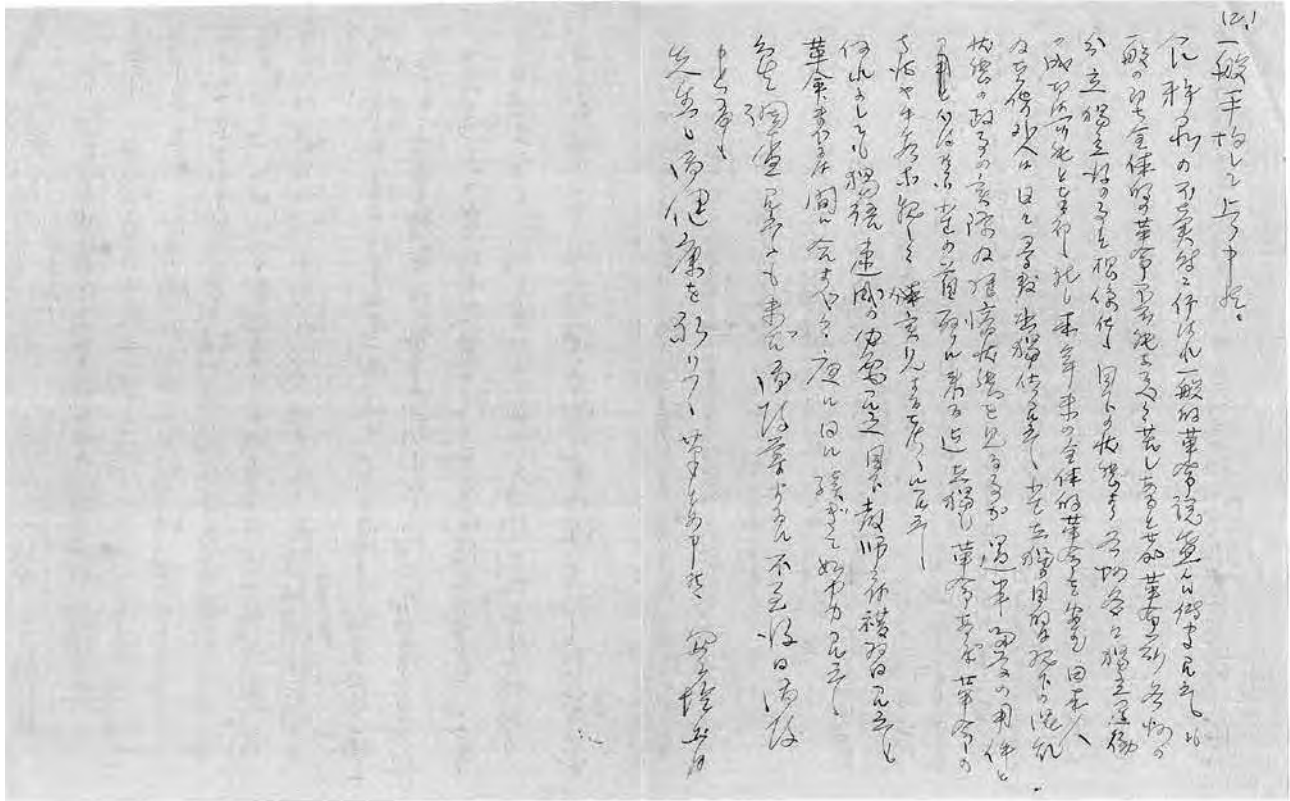


〔便箋の表面〕

(1) 先生へ 十一月二日 在伯林 弘一 拝

謹啓先生に御健康専々一奉祈候之れ門下生一同同様にて願ふ事に有之候母校震火之報上海著港之節拝聞候間此の儘留
 学中止下船先生の膝下馳せ参し何かの御用勤めすべきか
 又は留学すべきかと色々煩悶仕候然れとも色々思案の末母
 校か難に心引かれつつも留学の目的達する事に決心し断然
 出発入獨仕候何卒此の儀心中御了察の上格別の御仁恕奉
 願候
 入獨後新聞紙は私立大学再建見込なく聯立の私立大学建立
 の儀ありとか色々悲觀的の記事掲載有之候然し我日本大学に於
 先生の御出になる以上天幕張りにて開校あるべしと心密
 に期待有之候然れとも東京の震火意外に大なるに付此の
 事すら案し申候折柄突然日本人倶楽部に於て日本

大学小石川及九段に於て開校すとの朝日新聞記事を
 拝見實際あの時位嬉しき事無之人前も憚からず
 思はず母校万歳先生万歳をとへ申候
 母校の隆盛先生の御健勝此の上にも奉願候
 當獨逸の國状日々に変化しマークの如き小生十月十七日入獨之
 當時は一ポンドに對し四十ミリアード(一ミリアードは十億マーク)なりしに其の後急落
 に急落を重ね一ポンドに對し今朝の如き四千ミリアード
 となり今夕又八千ミリアードと相成申候僅かに半月間
 に此の変動に有之萬事又如斯御座候(数の計算八千ミリアード(ド)を
 八ビリオンと申候)
 現下の聯立内閣又倒れ近日新しき内閣組織の由伝聞仕候
 聯立内閣に於て如斯今後の内閣何れに依るやとうわさ有
 之候
 物價目下の處小生在京中の日本の物價と大差無之候迄に



〔便箋の裏面〕

(2) 一般平均して上り申候

食料品の不賣時に行はれ一般的革命説盛んに傳聞有之候とも
 一般の即ち全体的の革命不可能なるべく若しあるとせば革命前各州の
 分立独立後の事を想像仕候目下の状態より各州各々獨立運動
 の成功は可能と奉存候然し本年末の全体的革命を案し日本人
 及其他の外人は日々多数出獨仕り有之候小生在獨の目的は現下の混乱
 状態の政事の実際及經濟状態を見る事が過半留學の用件と
 ○○○心得候間小生の首取りに来る迄在獨し革命あらば革命の
 事情や手段等親しく実見する考へに有之候
 何れにしても獨語速成の必要有之目下教師に付復習有之候
 革命までには間に合すべく夜に日に續ぎて努力有之候
 色々調査有之候も未だ御報導するに不至後日御報
 申上度候

先生の御健康を祈りつつ筆とめ申候 勿々頓首

2

この書簡の通信文の要点は、以下の五点であろう。

(一) 世耕先生は、上海到着の折に、関東大震災で日本大学も焼失したことを知り、帰国すべきか留学すべきか、大いに迷ったが、断固として留学することに決したこと。

(二) 日本大学の再建について心配していたが、ドイツに入国後に、ベルリンの日本人倶楽部で日本大学再建についての記事を朝日新聞で読み、大感激したこと。

(三) この当時のドイツの経済事情については、特にハイパー・インフレーションについて、詳しく触れられ、ドイツに入国された頃の十月十七日の為替レートは一ポンド四〇〇億マルク、十一月二日朝には一ポンド四兆マルク、同日夕方には一ポンド八兆マルクという超急激な変化であること。

(四) この当時のドイツの政治情勢に触れられ、この時期の連立内閣の倒壊不可避で次期内閣の政党基盤が取り沙汰されており、また全体的革命は不可能であるものの各州の独立運動は成功する可能性があること。

(五) ドイツの危機的な経済や革命的な政治の状況を見るのが、留学の目的であるので、命を落とすまでそれを考察するつもりであり、その考察のためにドイツ語の速成が必要なので、日夜それに励んでいること。

ここであらかじめ注意を要することは、封筒の裏側や書簡の冒頭に

3

十一月二日と月日は記されているが、年は記されておらず、しかも封筒の表側に貼付されていたはずの切手が、先に述べたように、欠落していて消印が確認出来ない。したがって、この書簡が記された年や投函された年は直接知ることが出来ない。だが、右記の(一)・(三)から一九二三年のことと確定できる。

それ故、この書簡が記されたのは一九二三年十一月二日であると確定出来るのであり、投函日も同日かその直後であろうと言える。②・③・④の書簡の場合、封筒に貼付された切手が失われずに残っており、消印から投函場所がベルリンのヴィルマースドルフ (Wilmerdorf) 地区であることが分かり、後に触れるように世耕先生の下宿があったヒンデンブルク (Hindenburg) 通りはこの地区に属していた。故に、この①の書簡も投函場所はヴィルマースドルフであつた可能性が高いと推測される。

また、この書簡や他の三通の書簡も、封筒に記されている世耕先生のアドレスはドイツ・ベルリンの日本大使館気付となつている。山岡先生からの返信などが来た場合、日本大使館気付にした方が安全かつ確実であるという判断が働いたのではないかと思われる。事実、日本大使館の別館の事務所(アーホルン [Ahorn] 通り一番)には、ベルリン在住の日本人宛に届いた書簡が置かれおり⁷、自分宛の書簡を捜しに日本人は来ていたようである⁸。

3

先に纏めた(一)から(五)までの五点につき、以下少しく論究することにしよう。

先ず(一)についてであるが、東洋史学者内藤湖南(一八六六―一九三四)の『航歐日記』によれば、内藤が搭乗した伏見丸は、大正十三(一九二四)年七月六日に神戸を發つて、同月十日に上海に入港している⁹。

これを勘案すれば、世耕先生が搭乗された伏見丸は大正十二(一九二三)年九月二日に神戸港を解纜している¹⁰ので、同月六日に上海に着港したと言えよう。したがって、世耕先生が上海到着の際に関東大震災による日本大学焼失の詳報に接し、行こうか戻ろうかと同地で「色々煩悶」されたのは、同年九月六日のことになる。世耕先生が搭乗された伏見丸の上海入港の月日を直截に示す一次史料はまだ発見できていないので、それは今後の研究課題としたい。

次に(二)についてであるが、世耕先生のドイツ留学の時期よりやや後の、一九三六年にベルリンで刊行された野一色利衛編『獨逸案内』によれば、「獨逸日本人會」(Japanischer Verein in Deutschland)は「伯林在住の邦人より成り」「官廳、會社、銀行、商店等の團體に属する人々を團體會員」とし、「留学生、旅行者を普通會員」とするもので¹¹、「日本人相互の親睦を圖り、常に有益な見學等を催して」おり、「日本の新聞、雑誌、碁、將棋、麻雀、撞球等を備

へ日本食堂も設けて」¹¹いた。ベル

リン在住の日本人はここを「日本人倶楽部」と呼び¹²、よく利用しており、殊に「日本の新聞」を閲覧する者は多かつたようである¹³。この「獨逸日本人會」は一九二三年に創立され、当時はビュロー (Bülow) 通り二番にあつた¹⁴。ベルリンの南西部は、この当時、日本人の多く住む地域であり、「獨逸日本人會」もその地域にあり、世耕先生の下宿のヴィルデ (Wilde) 家のあるヒンデンブルク (Hindenburg) 通り¹⁵もその地域にあることから、世耕先生は研究の合間に「日本人倶楽部」を訪われ、そこに備え付けられた日本の新聞を読み、日本の様子を知らうとしておられたと思われる。この書簡で言及されている朝日新聞掲載の記事が、具体的に何時刊行されたものに掲載されたのかは、現在のところ分らない。これも今後の研究課題としたい。

4

さらに、(三)についてであるが、この書簡における当時のドイツにおけるハイパー・インフレーションに関する世耕先生の言及は非常に犀利である。それは、留学に際し、日本大学から命じられた専攻科目と関係があると思われる。前述のように世耕先生は「日本大学留学生」としてドイツに派遣された訳であるが、留学発令当時の日本大学側の文書は見いだせないで、どのような条件

で派遣されたのかは、従来知ることが出来なかった。だが、世耕先生のドイツ留学について、日本大学が「大正十五年一月十九日」付で作成した文書を「山岡萬之助関係文書」の中に発見することが出来た¹⁶。この史料では「世耕弘一 明治廿六年三月廿日生」として、「原籍」は「和歌山縣」、「學修セル學校」は「獨逸伯林大學」、「日本大學ヨリノ給費額」は「貳千七百圓」で「帰國旅費給與ノ見込」、「大阪朝日遣外社員トシテ給費額」は本人との直接関係で学校側としては「詳ナラズ」、「選抜成績」も「不詳」、「學校成績」は「舊令」（明治三六年公布の「専門學校令」を指す）による学部卒業生にて三十二名中「成績優良」で、「留學ヲ命セラレタル専攻科目」は「經濟學」と記されており、末尾に「右ノ通りニ候也」であると明記され、日本大学印も押されている。

(三)について理解するためには、当時のドイツの混沌たる経済事情につき、ごく簡単に触れておかねばならない。ヴェルサイユ条約に規定されているドイツの賠償金支払いについて、一九二一年三月から四月にかけて開催されたロンドン会議の結果、二三〇億マルクと決定された¹⁷。そして、一九二三年一月にパリで連合国首相会議が開催され、同年以降ドイツが履行すべき賠償金の支払い方法について協議されたが、賠償金取り立てに強硬なフランス側と穏健なイギリス側とが厳しく対立し、この会議は不調に終わった¹⁸。フランス側は、ドイツ側からの賠償として供給される石炭などの不足を理由にして、同月十一日にベルギーとともにルール地方の軍事占領を強行した¹⁹。両国軍はドイツ産業の中心部たるルール地方の工業設備を占領し、石炭その他の供出を命じ、租税や公共機関の金庫なども差し押さえた²⁰。これに対してドイツのクーン(Cuno)内閣は、同月十三日にルール地方の住民にいわゆる「消極的抵抗」(passiver Widerstand)を命じた²¹。占領軍に対するゼネ・ストを意味する、この政策によってドイツの経済は深甚な影響を蒙り、紙幣が乱発に乱発を重ねられ、ハイパー・インフレーションが急激に進行した²²。一ドルに対するマルクの為替レートは第一次世界大戦前の一九一四年七月には四・二マルク、大戦後の一九二〇年一月には四一・九八マルクであったのに、一九二三年一月三十一日には四九〇〇〇マルク、同年十月十一日には五〇億六〇〇〇万マルク、そして同年十一月三日には四二〇〇億マルクとなった²³。同年八月十三日に成立したシュトレゼマン(Stresemann)内閣は、九月二六日に「消極的抵抗」の打ち切りを敢行し、十一月十五日に不動産や商工業資産を基礎とする Rentenmark (Rentenmark) を発行し、一兆マルクを一 Rentenmark と交換した²⁴。かくしてハイパー・インフレーションがまことに奇跡的に収束に向

かい、翌一九二四年十一月に金を本位とするライヒスマルク(Reichsmark)が導入された²⁵。

世耕先生がベルリンに到着された一九二三年十月は、右に掲げた対ドル為替レートからも明白なように、ハイパー・インフレーションが急激に進行していた時であり、この書簡が出された同年十一月初めにはそれが猖獗を極めていた時期だったのである。換言すれば、世耕先生はこのハイパー・インフレーションの究極状態を目標とした日本人の一人だったのである。「ドイツ留学の憶い出」によれば、世耕先生が下宿されたヴィルデ(Wilde)家は「昔は軍隊へ服などを納入する御用商人であった」が、そのころは「その家が一番困っていたときのよう」で、「水道や電気のコストも満足に払えない状態であった」²⁶。そして、ヴィルデ夫人は、事ある毎に、下宿人を置くような状況になったのを嘆き悲しんでいた²⁷。ハイパー・インフレーションは、ドイツにおける都市の中産層の貯蓄などを無に等しいものにして、特にこの階層に大打撃を与え²⁸、世耕先生の下宿先のヴィルデ家の夫人が悲嘆に暮れたのはこうした経済的背景があった訳である。世耕先生はこのハイパー・インフレーションの猛威が Rentenmark の発行によって劇的に克服される過程を目撃されて、政府の経済政策の重要性を深く認識されたことが推測される。

5

それから、(四)についてであるが、この書簡で触れられている当時のドイツにおける政治情勢を理解するには、第一次世界大戦後のドイツの、まさに混沌たる政治の流れを簡明に整理して必要がある。一九一九年に成立して一九三三年に終焉したドイツ共和国は、この国のヴァイマル憲法(一九一九年八月公布)に因み、通常ヴァイマル共和国と呼ばれる。ヴァイマル共和国時代を通じ左派・中道派・右派の多くの諸政党が存在したが、単独過半数を占めた政党はなく、多くの場合は社会民主党・民衆党・中央党などの諸政党が中心となり連立内閣を形成した。「消極的抵抗」政策を打ち出したクーン内閣を支えたのも中央党・民衆党と人民党およびバイエルン人民党であった²⁹。本来的に右派であった国家人民党の中心人物であったシュトレゼマン(Gustav Stresemann 1878-1929)は、しだいに民主的な思想に傾き、共和国を支持するようになった³⁰。「消極的抵抗」政策が生き詰まり、クーン内閣が倒壊した後、国家人民党が社会民主党・民衆党・中央党と連合して、一九二三年八月十三日にシュトレゼマン内閣が成立した³¹。この連立内閣の時代に世耕先生はベルリンに到着されたのであり、この書簡で触れられている、近い内に倒れそうな「現下の連立内閣」とは、このシュトレゼマン内閣を指しているのである。そして、この内閣は

事実同年十一月二三日に倒壊し³²、中央党を中心にした民主党・国家人民党・バイエルン人民党の連合により、マルクス (Max) 内閣が同月三十日に成立するのであり³³、それがこの書簡にある「新しき内閣」ということになる。

一九二三年十一月二日の時点で「現下の聯立内閣又倒れ近日新しき内閣組織の由伝聞仕候」で述べられていることに、大いに刮目しなければならぬ。何故ならば、以下述べられるような経緯で、まさにこの日に「現下の聯立内閣」、即ちシュトレゼマン内閣から連立を組んでいた社会民主党の三人の大臣が桂冠して閣外に去り³⁴、倒閣の危機が生じたからである。シュトレゼマン内閣がフランス側の圧力に屈するような形で「消極的抵抗」政策を破棄したことは、ドイツ国内の諸州に大きな波紋を投げかけることになった。南ドイツのバイエルン州は有力な州で、しかも独自の強い存在であった。この当時の同州では右翼的政権が樹立されており、そうした状況下で叢生した過激な右翼団体は他州とは異なり抑制されず、共和国政府も拱手せざるをえない面があった³⁵。そうした右翼団体の一つである国民社会主義ドイツ労働者党 (通称はナチス党) がヒトラー (Adolf Hitler 1889-1945) の元で党勢を伸ばしていった。他方、同年、中部ドイツのザクセン・テューリンゲン両州では社会民主党政権が成立していたが、その

いずれにも共産党員が入閣することになり、コミンテルン (一九一九年にレーニンによって設立された) がこの両州で革命を起そうという動きを示した。十月にシュトレゼマン内閣は、両州におけるかかる動きには断固たる態度で臨み、それらを制圧した³⁶。社会民主党は、この両州のみに厳しい対処をしたシュトレゼマン内閣に不満を持ち、前述のごとく、十一月二日に連立政権から離脱したのである³⁷。また、この十月にはフランスの策動によるライオン地方独立の動きもあったが、鎮圧されたし³⁸、同月末にはハンブルク市では共産党の蜂起も起こった³⁹。他方、シュトレゼマン内閣による「消極的抵抗」政策の破棄に対する右翼勢力の反発も極限に達し、十一月八日にヒトラーがミュンヘンで臨時政府樹立を宣言し、翌九日に武装デモを敢行した (「ミュンヘン一揆」⁴⁰が、さすがにこれは警官隊に鎮圧されて、ヒトラーは逮捕・収監された⁴¹。シュトレゼマン内閣はかくして国内政治の分裂を回避し、十一月十五日のレンテンマルク導入により国内経済の再建の道を拓いたものの、先述のように社会民主党の支持が失われたので、この書簡で「現下の聯立内閣又倒れ」そうであると記されているように、十一月二三日に倒閣したのである。

一九二三年十月から十一月初めにかけての危機的なドイツの政治状況を踏まえたものと言うべきであろう。世耕先生はかくして議會制民主政治の冷厳な側面も觀察されたであろうし、穏健な自由主義の政治家としての世耕先生のその後の御活動に想い輸すならば、遠雷の如く不気味に轟くヒトラーの全体主義的な動きにも危惧を以って考察されておられたと拝察され、甚だ意味深い。

6

さらに (五) についてであるが、世耕先生のドイツ語研究については、「ドイツ留学の憶い出」において、関連する陳述が見られる。すなわち、世耕先生は恩師のプリル (Emil Priil 1867-1940) 教授宅に頻繁に出入りして、同教授からの教えから多くを学び、「ドイツをよく見てゆくことと、ドイツ語をしっかりとやっておくことが一番大切だ。ドイツという国とドイツ語をしっかりと覚えてゆけば、日本へ帰ってから何年経ってもドイツの本が読めるだろう。」というドイツ「留学の秘訣」をこの教授から授かり、留学中は忠実にそれを実行して、大学に行く以外は「主として本を読むことを中心にして」勉強されたようである⁴²。「プリル教授からいわれた、基礎をしっかりとやれという考えに基づいて」⁴³、世耕先生は最終的にはドイツ語の研究に集中され、それは留学を終えて帰国された年、すなわち昭和二 (一九二七) 年の十二月二十日に刊行された『*Deutsche Sprache und Stilliche*』 (獨逸語並びに文辭論) という労作として結晶したのである⁴⁴。本書の「はしがき」において、それが書かれた時及び場所については、以下のよう記されている⁴⁵。

千九百二十七年の春
獨逸ベルリン、ヒンデンブルク街の
假の宿にて しるす
ここで「春」と言われているのは、立春 (二月四日) から立夏 (五月六日) までの期間を意味していると思われる。世耕先生は「ドイツ留学の憶い出」において帰国の時期について「日本へ帰ったのは昭和二年二月、行くときは船であったが、帰りはシベリヤ鉄道でロシアを通って帰って来た。」⁴⁶と陳述されている。昭和二 (一九二七) 年二月十七日にベルリンを發つてシベリヤ鉄道を利用して日本に向かった画家の八木彩霞 (一八八六-一九六九) は、三月三日に下関に着いている⁴⁷。つまり、この時点でシベリヤ鉄道を利用した場合、ベルリンから日本まで十五日ほどかかっている。したがって、二月中に帰国するには、遅くともベルリンを同月十四日位までに発たねばならない。以上から、『*Deutsche Sprache und Stilliche*』 (獨逸語並びに文辭論) が脱稿して、「はしがき」が書かれたのは、一九二七年二月四日から同月十三日位の間であり、本稿で取り上げたこの書簡で述べられている世耕先生のドイツ語研究の結

実したのは、時満ちて留学がまさに終わらんとする時だったということになる。

注

- 1 「大学令」(大正七年公布・翌八年施行)において、大学は一定数の専任教員を任用しなければならぬと規定されており、日本大学は卒業生を選んで海外留学させ、帰国後に教員として採用する方途をとった。これは実質的には在外研究員の性格を持つものであったが、当時は「日本大学留学生」と呼ばれた。日本大学百年史編纂委員会編『日本大学百年史』第二卷、(日本大学発行 平成十二年)一二四～一二五頁。
- 2 その後、山岡先生は、昭和二(一九二七)年に内務省警保局長となるも、翌年依願退職した。昭和四(一九二九)から同二一年までの間は貴族院議員も務め、その間の昭和七(一九三二)年には関東庁長官も務めた。山岡先生の官歴は細島喜美著『人間山岡萬之助傳』(講談社 昭和三九年)所収の「略歴譜」などに依った。
- 3 その後、昭和二七(一九五二)年に、山岡先生は日本大学名誉総長となっている。山岡先生の日本大学での職歴も細島喜美著前掲書所収の「略歴譜」などに依った。
- 4 関東大震災の際に、監獄局長山岡先生が機略によって囚人の脱獄を防止したとの讀賣新聞掲載記事を日本人倶楽部で見て、嬉しかったので筆を執ったと述べられ、その記事の切り抜きが同封されている。調査の結果、それは大正十二年九月十四日付の讀賣新聞に掲載された記事であることが分った。
- 5 深川の材木店からの融資が突然断られたので学費が工面できないので、これを送って欲しい旨が記されている。この書簡はモスクワまでの航空便を利用したロシア経由で送られている点も、注目される。尚、ここでいう深川の材木店とは、曾て勤務しておられた「大湊木材」であろうか。
- 6 先便を航空便で出したので確実に届くか否か不安なため、先便とほぼ同じ内容の書簡をロシア経由の汽車便で出した旨が、この書簡の追伸部分に述べられている。
- 7 和田博文・真鍋正宏・西村将洋・宮内淳子・和田桂子共著『言語都市・ベルリン 1861～1945』(藤原書店 平成十八年)三九一頁。以下、本書は『言語都市・ベルリン』と略称する。
- 8 昭和二(一九二七)年に渡欧した哲学者和辻哲郎は、同年四月十八日付妻宛書簡(ベルリン発信)で、同月十六日に「大使館へ行って」日本からの二通の書簡を受け取ったと記している(『和辻哲郎全集』第二五卷(岩波書店 平成四年)二二二頁。以下、本書は『和辻哲郎全集』と略称する。)。大正十一(一九二二)年七月にベルリンに赴いた阿部次郎も「私は伯林にゐる間、たび／＼大使館に手紙をさがしに行つた。」と『游歐雜記 独逸の巻』(『阿部次郎全集』第七卷(角川書店 昭和三六年)三五三頁)において記している。
- 9 神田喜一郎・内藤乾吉編『内藤湖南全集』第六卷(筑摩書房 昭和四七年)四七四頁。
- 10 野一色利衛編『獨逸案内』(歐洲月報社 一九三六年)十九頁。
- 11 前掲書収録「獨逸日本人會」の広告頁。
- 12 『言語都市・ベルリン』三八七頁。
- 13 和辻哲郎は妻宛昭和二年五月五日付書簡で同年四月卅日に「夕食をたべに日本人会に行き、新着の新聞を少しよんだ。大阪朝日丈は十六日迄のが来てゐたが、これは中々開かないので読むわけに行かなかつた。仕方がないので、三月頃から四月十三日頃までの、朝日と毎日の夕刊のつゞきものをよんで帰つて来た。」と述べている(『和辻哲郎全集』第二五卷二二三～二三四頁)。
- 14 『言語都市・ベルリン』三八七頁。
- 15 桜門文化人クラブ編『日本大学七十年の人と歴史』(第二卷 洋社 昭和三六年)収録の世耕弘一「ドイツ留学の憶い出」十四～十五頁。以下、本書は『日本大学七十年の人と歴史』(第二卷)と略称する。
- 16 学習院大学法経図書センター所蔵「山岡萬之助関係文書」F1V-16。この文書についての史学理論による史料分析には、ここでは立ち入らなう。
- 17 有澤廣巳著『ワイマール共和国物語』上巻(東京大学出版会 昭和五三年)二二六頁。
- 18 有澤著前掲書二八〇～二八二頁。
- 19 有澤著前掲書二八二～二八三頁。Hrsg. von Verlag Ploetz, Der Grosse Ploetz. Auszug aus der Geschichte von den Anfängen bis zur Gegenwart. 31. aktualisierte Auflage. Freiburg. Würzburg 1991.S.925.
- 20 林健太郎著『ワイマール共和国』(中央公論社 昭和三八年)九七頁。以下、本書は林『ワイマール共和国』と略称する。
- 21 Ploetz, a. O., S.925. 林健太郎編『世界各国史』。ドイツ史(昭和四二年)二七四頁。以下、本書は林『ドイツ史』と略称する。
- 22 林編前掲書二七四頁。
- 23 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界史体系 ドイツ史3—1890～現在—』(山川出版社 平成九年)一四七頁。以下、本書は『世界史体系 ドイツ史』と略称する。
- 24 林『ワイマール共和国』一〇四頁。Ploetz, a. O., S.926.
- 25 林『ワイマール共和国』一〇五頁。Ploetz, a. O., S.927.
- 26 『日本大学七十年の人と歴史』(第二卷)十五頁。

- 27 前掲書十六頁。
 28 林『ワイマール共和国』一〇二頁。
 29 Ploetz.a.a.O.,S.925.
 30 林『ワイマール共和国』一〇四頁。
 31 Ploetz.a.a.O.,S.925. 林著前掲書一〇四頁。
 32 Ploetz.a.a.O.,S.926.
 33 Ploetz.a.a.O.,S.927.
 34 Hagen Schulze,Weimar-Deutschland 1917-1913,Siedler deutsche Geschichte Bd10, Berlin 1994,S.268.
 35 林『ワイマール共和国』一〇六頁。
 36 林『ワイマール共和国』一一三～一一四頁。
 37 林『ワイマール共和国』一一四～一一五頁。
 38 Ploetz.a.a.O.,S.926. 林『ドイツ史』一七五頁。
 39 『世界史体系 ドイツ史3』一五二頁。
 40 Ploetz.a.a.O.,S.926. 林『ワイマール共和国』一一〇頁。
 41 『世界史体系 ドイツ史3』一五二頁。Ploetz.a.a.O.,S.926.
 42 『日本大学七十年のひと歴史』(第二卷) 十三～十四頁。
 43 『日本大学七十年のひと歴史』(第二卷) 十四頁。
 44 『日本大学七十年のひと歴史』(第二卷) 十四頁。
 45 世耕弘一著『*Seitliche Spruch und Stillehre* 獨逸語並びに文辭論』(寶文館 昭和二年)は国立国会図書館デジタルコレクションを利用して閲覧した。

- 47 (第二卷) 十四頁。
 八木彩霞著『彩筆を揮て欧亜を縦横に』(文化書房 昭和五年) 四七一頁・四七六頁。昭和四年七月に鉄道省運輸局が発行した『西伯利經由歐洲旅行案内』(二頁)によれば、シベリア鉄道を利用すると日本の「内地」とヨーロッパ主要都市間は十四～十五日で済み、一等車の場合の運賃は六〇〇円前後であった(和田博文編『シベリア鉄道』(『コレクション・モダン都市文化』第八一卷 ゆまに書房 平成二四年)収録)。大下宇陀児は「世耕弘一と小林綺は、薪を焚いて走るシベリヤ鉄道十二日間の旅をして日本へ帰って来た。」(『土性骨風雲録 教育と政治の天下人 世耕弘一伝』(鏡浦書房 昭和四二年)二六六頁)と述べており、八木著前掲書や『西伯利經由歐洲案内』で述べられている所要日数と違いがある。

追記

学習院大学法経図書センターから「山岡萬之助関係文書」EJNの史料の本稿での掲載、電子化及び公示に許可を頂いたことに感謝したい。年の表記は、原則として、ヨーロッパにおける場合は西暦を、日本における場合は年号を使用している。本稿では近畿大学関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、その点は諒とされたい。

大学アーカイヴズと校史関係
史料に関する建学史料室研究

プロジェクト活動報告

第一回総務部現況調査

(平成二十六年六月二十五日)

建学史料室研究員富岡勝と数下信幸及び職員西尾さかえの三人で、総務部保管の校史関係史料の第一回現況調査を行った。今回は総務部職員に案内いただきながら、整理済み史料が保管されている本館倉庫の他、未整理の史料が一時保管されている数カ所のスペースを見学調査した。設置認可関係公文書などの基本史料や行事関連資料等の所在状況を概ね把握し、大学アーカイヴズ構築に向けて有用な史料群が総務部に保管されていることが確認できたことは大きな収穫であった。次回からは、シリーズ(ファイル名など)による史料のかたまり)ごとに具体的に調査を進めていきたい。

(経済学部准教授

建学史料室研究員 数下 信幸)

第三回勉強会

(平成二十六年一月二十日)

平成二十五年度及び二十六年度の研究活動内容と役割分担の確認、検討を行った。次に、麻布学園におけるアーカイブズへの取り組みに関する事例やアーキビスト資格認定制度について報告された。その他に、

広報誌の編集について話し合いを行った。

(九州短期大学准教授

建学史料室研究員 三木 一司)

第四回勉強会

(平成二十六年三月三日)

平成二十六年年度の研究・調査活動に向けた分担案及び学内校史関係史料現況調査の方法について話し合いが行われた。併せて、文献を踏まえた議論や、立命館の調査報告及び日本アーカイブズ学会研究集会の参加報告が行われた。

(法学部教授

建学史料室研究員 上崎 哉)

第五回勉強会

(平成二十六年五月十七日)

平成二十六年年度における学内の校史関係史料の現況調査、学外の史料調査など、調査・研究の計画と分担及び方法について討論が行われた。また本プロジェクトの活動をまとめて学会誌に投稿したことなどが報告された。

(文芸学部教授

建学史料室研究員 鈴木 拓也)

第六回勉強会

(平成二十六年七月五日)

平成二十六年年度の調査・研究計画、学内校史関係史料現況調査の方法について確認した。また、アーカイブズ関係史の文献報告、総務部第一回現況調査の報告、立命館史資

料センター準備室での調査報告がなされた。また、建学史料室の情報発信方法について検討していくことになった。

(文芸学部准教授
建学史料室研究員 酒勾 康裕)

近畿大学をめぐる史資料 1
—大阪理工科大学閉校時に
作成された卒業生名簿—

教職教育部教授

建学史料室研究員 富岡 勝

本学の歴史に関する史資料の収集・整理を活性化していくために、調査・研究で目にした史資料を本誌で少しずつ紹介していきたい。

今回紹介するのは、大阪専門学校閉校を記念して作成されたと思われる『昭和二十八年三月 卒業生名簿 大阪理工科大学』である(以下、『大阪理工科大学卒業生名簿』と略)である。インターネット上の古書店情報サイト「日本の古本屋」を通じて発見できた。

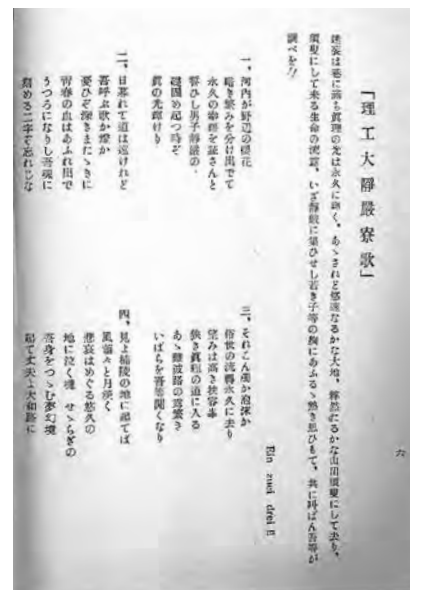


『大阪理工科大学卒業生名簿』表紙

大阪理工科大学は、一九四三(昭和一八)年三月から一九五三(昭和二八)年三月の十年間だけしか存在しなかったが、本学の歴史上重要な存在である。

一九四九(昭和二四)年の新制近畿大学設置の母体となったのは、大阪理工科大学と大阪専門学校の二校であったからである。大阪理工科大学に関する史資料は、まだわずかしか確認されていない。『近畿大学創立45年の歩み』(近畿大学、一九七〇年)の七頁に次のように記述されているだけである。以後の本学沿革史でもこれ以上詳しい情報は記載されていない。

昭和十五年頃になると、理工系の高度の知識を持った技術者に対する社会的要請が高まって来た。昭和六年九月十八日に満州事変が勃発し、その後、日支事変が長期化の様相を示しはじめ、軍需産業からの必然的な要求であった。このような状況の中で、昭和十五年には、日本大学専門学校の中に、理工科が設置され、数学部、理学部、応用化学部を開設し、昭和十六年には、第二部理学科が設置され、化学科、数学科、物理科を開設した。その後、教授陣が次第に整備されて、昭和十八年三月に



大阪理工科大学の寮歌

は、大阪理工科大学が設立され、財団法人大阪専門学院は、財団法人大阪理工科大学と改称され、日本大学大阪専門学校は、大阪専門学校と改称した。こゝに、財団法人大阪理工科大学は、大阪理工科大学、大阪専門学校、日本工科大学、及日本工業学校を経営することになったのである。

今回紹介する『大阪理工科大学卒業生名簿』には、応用化学科・化学科・数学科・工業経営学科の計四学科の恩師の氏名・住所、卒業生(第一回生・第六回生)の氏名・住所・就職先が記載されている。これらの記述内容は、本学総務部などに保存されている簿冊や本学の同窓会名簿などに記載されていない可能性もあるだろう。その上、以下のような内容も含まれていることから、『大阪理工科大学卒業生名簿』は貴重な史料であるといえるだろう。

写真「大阪理工科大学本館」
大阪理工科大学歌(土井晚翠作)
写真「土井晚翠直筆書翰」(石倉小三郎宛)
石倉小三郎「閉学へのぞみ」
「理工大静寂寮歌」
「逍遙歌『漂泊の歌』」
石倉小三郎は、第四高等学校教授・第八高等学校教授・第七高等学校教授・高知高等学校校長・大阪高等学校校長などを歴任して、旧制高等学校での教育活動に三十五年間従事した後、大阪理工科大学の予科長に就任した人物である。「閉学へのぞみ」の中で、次のように閉校当時を回顧している。

昭和十八年の春まだ寒い頃の事であつたと思ふが大阪理工科大学設立の認可が定まり勅許も下りて愈々発足の準備を行う事となり私に予科長を引き受ける様時の理事長小野村博士より懇囑を受けた。「略」私はこの委嘱をば非常な喜びを以て迎へた。大なる光榮として感じつつまた僭越乍ら大なる自信を以て御引受けしたのであつた。「略」新入学の学生諸子も気持の好い人達許りで私は私が従来経験したことのない程な信頼感と気安さに浸りきつて明朗な雰囲気に包まれ乍ら毎日遊びに行く様な気分が学校に通つてゐた、健康も著しくよくなつた。私にとつてこんな楽しかつた事は未だかつてなかつたとも云ひ得る。「略」

この様な発足ぶりで校舎はお粗末極まるものであつたが教授陣も学生の質も官立の優秀校に比して少しも劣る事なき内容と統一ぶりを具現し得たのであつた。

旧制高等学校の教育は、寄宿舎や課外活動などにおける生徒間の密接なつながりや教養主義など単なるエリート教育というだけでなく人間

形成の側面が特徴の一つであるが、一九一八（大正七）年の大学令以降、私立大学の予科における教育も人間

各地のアーカイブズ紹介 2

―学校法人立命館総務部立命館史資料センター準備室での聞き取り調査報告―

文芸学部准教授・建学史料室研究員

酒匂 康裕

本研究プロジェクトで実施している各地のアーカイブズの訪問調査として、今回は平成二十六年二月二十六日に学校法人立命館総務部立命館史資料センター準備室（以下、センター準備室とする）にて聞き取り調査を行った。調査にご協力いただいた方は、センター準備室課長である佐々木雅美氏と課長補佐の奈良英久氏、また、調査担当は教職教育部の富岡勝教授と九州短期大学の三木一司准教授（共に建学史料室

形成に注意が払われたことが、教育史研究において近年注目されつつある。

大阪理工科大学の予科教育も戦中・戦後の激動の時代に存在したとはいえず、学生たちが寮歌や逍遙歌を口ずさみながら連れだつて散歩するような、和気藹々とした雰囲気であつたのかもしれない。

今後、更なる史資料を通じて大阪理工科大学およびその予科における教育の内実が明らかになっていくことを願う。

研究員）、そして報告者の三人であつた。調査内容はアーカイブズの設立経緯と組織形態、活動内容を中心とし、その他聞き取りを行う中で随時伺うという形式で行つた。

立命館の歴史は西園寺公望が一八六九年に私塾「立命館」を創始したことに始まるが、中川小十郎が「私立京都法政学校」を開いた一九〇〇年を創立とし、二〇〇〇年に百周年を迎えた。これより前、一九八一年に立命館史編纂委員会が発足、同編纂室が設置され、一九八六年から一九九〇年までの間に『立命館八十五年史資料集』（第一集）第八集および目次）が発刊された。その後、一九九一年三月に立命館百年史編纂委員会が設置され、『立命館百年史』の編纂事業が開始、一九九九年から『立命館百年史』の発刊が始まり、二〇一四年六月現

在、通史一から三まで、資料編は一と二が発刊されている。百年という期間に発生した各種史資料が、膨大な点数に及ぶことは容易に想像できる。聞き取りでは、基礎的な史資料の収集は非常に重要であることが強調されており、本学においても早急に取り組むべき事案であるように思われた。

またセンター準備室は現在、教員、職員（専任、専任以外）計九名で構成されているが、特に職員の方が実質的な作業を進める上で、非常に大きな役割を果たしている印象を受けた。『立命館百年史 通史三』の執筆には教職員をはじめ、学園に関係した多くの方が携わり、一〇〇人を越える執筆者がいたとのことである。これは、執筆者により執筆内容のトーンや分量が多様であり、こ

れをいかに調整していくかが年史全体のバランスと関わってくることから、担当職員にはこのようなスキルが求められることが分かった。そして、『立命館百年史』は大学の自己点検や評価、卒業生からの問い合わせに対する回答、新規事業を立ち上げる際に過去の事例を振り返るなど、多くの場面で活用されているという。

センター準備室では、「立命館史資料センター」の設置に向けて、より活発に業務をこなされるようである。これは、年史編纂等で培った貴重な経験の積み重ねがあつてのことであろう。今回の聞き取り調査で伺った内容、ご提供いただいた資料等は本学のアーカイブズの活動に大いに参考になると思われる。



準備室前の展示物



展示されている立命館百年史

薬学部シンボルツリー 「サクラ」 世耕弘一先生像のお傍へ

薬学部薬用植物園・園長

松田 秀秋

昭和四十一年、鉄筋コンクリートに新築された薬学部16号館前の薬木園に一本のサクラの木が植えられた。それから約五十年、大きく成長したサクラの木は薬学部のシンボルツリーとして、毎春多くの人の目を楽しませてきてくれた。しかし、大学創立百周年を見据えた、東大阪キャンパスの大規模整備に伴って、薬学部附設の薬用植物園・薬木園が学外に移設されることになり、薬用植物の取捨選択も余儀なくされた。関係者らによりサクラの木の保存と、その移植先が近畿大学創設者・世耕弘一先生像のお傍へと決定された。このサクラの木はソメイヨシノ



薬学部での満開のサクラ



根を守るために作られた根鉢

で、一般的に「サクラ」と呼ばれるが、そもそも「サクラ」という植物はなく、サクラ属の総称のことである。サクラの語源には諸説あり、麗らかに咲くので「咲麗（さきうら）」の意、「開映え（さきはえ）」つまり栄えるという意や「咲く」が群がるようにたくさんあることから「サクラ」であるとする説もある。サクラの華美でない淡い花色や散り際の潔さ、人生の節目の時期を晴れやかに飾るように開花する姿が日本人の心根に適した植物といえる。

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」と古くから言われ、桜は枝を切るとそこから菌が入り込んで腐りやすくなるため切らないほうがよく、梅はたくさん実をつけるように立ち枝が剪定される。この樹高12メートルの巨木をいかに枯らすことなく安全に移植させるか、検討が重ねられた。

平成二十五年十二月二十七日午前九時、造園業者・明石緑化の主導のもと作業が開始された。根の周りを

養生し、60トンクレーンで吊り上げ、10トントラックに載せる計画だが、根を守るために作られた根鉢は直径四メートル、重量は12トンを超え、吊り上げようにも上がらない。ブチッ、ブチッ、ブチッと、底根が切れる低い音が周りに響くと同時に空が急暗転、雷鳴が轟くとともに電がザーッと音を立てて瞬時に降り積り、工事は二時間ほど中断した。その後、根鉢を3メートルに縮小し、8.5トンまで軽量化を試みて三時間後ようやくトラックに積載された。しかし、枝ぶりが良いため、側道のイチヨウの枝が絡まぬようチェーンソーで払いながら慎重に進められ、像までの300メートルの移動に三時間を要した。こうして、移動による木へのダメージを最



十三時間に及んだ大移植作業



新天地で見事に開花したサクラ

小限にするよう細心の注意を払いながら行われた大移植作業は十三時間にも及んだ。

平成二十六年四月、新天地である世耕弘一先生像のお傍で見事にサクラが開花した。これからも毎春、大きな志をもって入学する学生諸君を世耕弘一先生とともに見守ってくれることであろう。

謝辞：薬学部・村岡修先生、村田和也先生、中村真也先生に写真提供いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

世耕初代総長の 自然主義的人間愛 (敬天愛人)

元理工学部教授

堀部 治

日本の歴史教育の内容は過去の人物の歴史的事実、実績など中心の上面だけに止まり、中には公私の別無き強欲の冷血漢でも、結果良ければ、全て良しの短絡的評価に終わって、大勲位、公爵、元老を得た事でも無条件に偉人に列している。この点に対してか、堀田善衛(一九一八～一九九八)小説家、芥川賞)は折角、作家が苦心して掘り起こしている人間、社会の内面の歴史を歴史家は活用する事に疎いことに嘆いている。教育は本来が内面重視の精神的発達を促す教養を基本とする。あらゆる機会を通じ、事象の道理を悟り、客観視する精神の発達に資するものである。世耕初代総長が中国の古典四書の大学から引用し強調した「心廣体胖」に尽きる。⁽¹⁾ この意味するところは全ての事物は自然の摂理に従って存在しており、この存在の内面を切り開いて摂理を洞察し体得する。これが内面にまで広がる豊かな心と成る。外見は図形で、内面は言葉でなければ表現出来ず、内面が豊かになればなるほど、これらを区別する内面の表現には、言葉の意味する内容、使用習慣が厳格で限定的で

なければ伝達はできない。言葉の未熟、乱れは所詮、価値観が目に見える有形物に限られ、機能することにより生まれる無形の存在に対する認識のない幼児並の内面未熟で自己確立のないのと同列である。

総長が経済企画庁長官の折り、経済演説の官僚の原稿に後進国との見下げた表現を別の用語に変えるように指示した。⁽²⁾ 海外では、日本を工業化先進国と呼ぶように、何の先進国かを示さなければ、疑惑が生まれる。結局、低開発国とした。そうであれば、勝手な解釈を許す未熟な表現である。文は人なりと言われていた。彼の本質を見通す人格の現れである。一般に、器を見て、中身を見ない井勘定の因習から、例えば、自由と言えど何の自由かの認識がなく、思想、信条の自由と現実での言動の自由の区別なく、傍若無人の言動がまかり通っている。現実での言動は自由、対等、相互主義の公序良俗の枠内での自由に過ぎない。表現の杜撰な人間を抑止するには心眼教育は欠かせない。

現実問題は常に前提に従属し、その必然的過程を経て結果を生む。日本人の、器を見て中身を見ない因習から、前提と結果との一体の考えがなく、結果だけに拘泥し、この前提の変化に対する認識が乏しく、この変化無視が結果を誤る。例えば、同盟、条約は利害を共有する前提で成り立つ。これが稀薄になれば、同盟、条約は実質失効する。タイム・ライ

フの人間の歴史を見れば、一八七一年ドイツを統一し、帝国宰相となつたビスマルクは同盟条約を軽蔑していたと指摘している。これに全く頼るなど本質的にも自立心に欠けて当然である。この事柄が読めない日本政府は戦前、ナチス・ドイツとの三国同盟過信で煮え湯を飲まされ、当時の内閣は外交の複雑怪奇を理由にして失墜、瓦解した。この反省から、その前提の動向を無視し、そのままの結果に頼る外交政策は危うい。

従って、政治家の選出には心が広く、大局観のある人物が不可欠である。民主主義の今日では、マックス・ウエーバーの言う如く、その国の政治には国民の平均的素養以上は期待出来ないと言えぬ。従って、選挙民の素養を高める心眼教育により、個人を確立し、心眼のある政治家を選出しなければ、政治の発展はない。現状では、目先の利の為には嘘も方便のご都合主義が実社会と言う世相から、八方美人に人気があり、総長のようない己に忠実で正義感が強く、高邁な見識と実行力のある候補者は一般受けがなく、容易に当選することとは難しい。だが、上記資料によれば、当選の確率はむしろ高く、選挙民の心広ければ更に高くなる。⁽³⁾

明治以来の教育は精神的発達無視の飴と鞭の心の狭い人材養育で、日清、日露の戦闘で連戦連勝、戦利に目が眩み、農民の極貧、帝国主義的国土膨張と相俟って、戦争は兵站の国力よりも精神力に頼る人命軽視の

軍国主義へと突入し、大東亜戦争(第二次世界大戦)となり、この総決算が、軍民一千万近くの人命を失い、廃墟の国家となった。総長はつとにこの様な事態を予見して戦争回避のために政界進出を決意したのは、ドイツ留学での実体験にある。

戦後、主権在民の民主主義政治となり、これを達成する教育制度へと発足した。だが、保守と革新政党間の選挙の目先の利の激突から不見識な教育介入で旧来の官尊民卑の官僚統制支配のための明治以来の結果重視の暗記模倣の教育のままとなり、且つまた、今日、かなりの規制撤廃の自由化が進んでいるにもかかわらず、今尚、現実よりも教育理念という器の観念論重視の議論倒れのままで中身の改善が放置されている。今必要なのは改善であり、それは終戦直後の地方分権教育制度そのもので、民主主義の主権在民から民主導の政治、官の公僕と言う精神的発達と政治的素養を身に付ける教育にあつて、これを達成するに必要な考える教育方法とこの発展を期する競争的教育制度である。この実現には、後述の如き人事制度と整合性のある採用方法の環境条件の整備にある。

以上の観点の本質は、総長の心の広い内面教育に対する情熱や世直しの政治に対する努力は近大の「不倒館」に収集された多くの資料の記述に見られる。⁽⁴⁾ これらの資料を参考に更に、その原点となる内面的価値

観を掘り起こし感想を述べてみた
い。

上記の資料の中には、自然を題材にした多くの墨筆の文言があるが、⁽⁵⁾それらは単なる描写ではなく、自然の因って立つの機能的道理を洞察し、わが心とした題材の書と解する。「心廣体胖」の書の心は、物事の奥に潜む真の姿、即ち、構造、機能を洞察し、普遍化し、客観的に事物を見る内面的豊かな心である。これを分かりやすくするために洞察の意味を込め「心眼廣体胖」と補足したとも思われる。この様な折角の教訓も建前が実社会のご都合主義世相では本音よりも建前に同化する。環境が人を創り、人が環境を創るの格言どおりである。心眼教育とは結果重視の暗記なく、結果の因って来たる前提の論理的過程の理解重視の教育であり、道理への心眼が磨かれ、自己に忠実な言行一致の客観視とな



心廣体胖



心眼廣体胖

る。パスカルの「考える葦」の中的一節、考える努力をせよ、そこに道德の原理がある、に通ずる。では、この様な教育を実現するには当然、それを必然とする背景の環境条件が必要である。例えば、人材登用では、この理解の度を職種に応じ判定するなどの採用方法が重視されれば、その必然的背景となり、自ら心眼教育へと移行する。民主主義の言動の質の向上も同様であり、このためには、自由なるが故に、啓蒙と格付けによる評価がなければ進展無く俗悪に向かうのが常である。

心の広い教育は機能など内面の観察、分析、洞察から、色々な仮説の下に、論理的思考を経て矛盾なく結果に至る試行錯誤の末に原理原則となる仮説を見出す思考訓練にあって、総長の言う無から有を産む教育研究であり、自ら、ごまかしは通じない真理、真実に対する敬虔な精神

的発達をもたらす。結果中心の暗記模倣の教育は、この発達とは無縁で、所詮、本音と建前の邪悪な心の抑止、矯正には無益であり、しかも、この教育の評価のみで社会的人材を登用する排他的制度から、思想信条を抑圧するなど本質を無視した邪悪教育と言う外ない。本質なくして、大局観は生まれず、民主主義国家となつて一世紀を迎えんとする今日、明治期以降の結果中心の暗記模倣教育の惰性のままでは上記の精神的発達が伴わず、立身出世の為に、平気で本音と建前の巧妙な嘘をつく八方美人の人物、苦情処理屋が、精進の気迫がなくても、持ち上げられ、反って、精進の出る杭は打たれる。この因習に拠る人材能力の逸失に気付いていない。

近年は国際化の優勝劣敗の波に迫られ、企業では、要職に、実績と能力ある者が年齢に関係なく、登用が見られる。だが、この波の埒外にある組織体では、旧態依然である。ところが、この点に関しては、上記資料を見る限り、流石に総長の人事配はつとに能力主義であった。当時では、時期尚早であったが、彼にとつては、心眼に拠る大局観と精進の気迫から当然の采配であったと思われる。政界にても同様で、上記の資料から読みとれる様に、彼はこのご都合主義の群れの世相を見下し、迫害が予想される戦時下に在っても政党政治を守ると言う信念を常に洗心で強固にし、日本自由党の孤塁を守つ

た心の冒険家であった。特に、議會を大政翼賛議會とする軍閥の政治支配と対峙し、同志三十六名を糾合し同交會結成に奮闘、政党政治を堅持した。戦後は、国民の窮乏を救う為、終戦に伴い長期戦に備えた大量の軍の隠退蔵物資の摘発を大蔵大臣、石橋湛山に献策し、気概の似た性格から、意気投合、直接総指揮を委嘱されるなど信頼は厚かつたのである。⁽⁶⁾

石橋湛山と言えば、東洋經濟新報の記者として、三十才台の若さで、明治神宮建立の運動がはじまつた時、彼は「何ぞ世界人心の奥底に明治神宮を建てざる」の一文を発表し、神宮建設に反対、その代り「明治賞金」を設立せよ、と提唱した。そんな地上の建造物よりも、「日本国民の否、否、世界民衆の心の奥に明治神宮を建つる事を考えぬか」その一案として「明治賞金」がある。「この資金から生ずる利子を以て年々一個乃至數個の賞金を作り、これを広く世界の文明に貢献せる發明、発見乃至思想芸術の士に与えること、かの有名なノーベル賞金の如くせば、これ実に先帝陛下の御時世を画して起りたる東西文明融合の大業を最も適切に進捗せしめる手段であつて・以下略」小島直記、「大過渡期上巻」新潮社より引用。この石橋湛山が総長の尊敬する三人の政治家の一人であることを知り、何故かと思った。それまでは上記のような両者の直接の交流に無知であつた

からである。(7) ところで、筆者、総長の死去の時期に就任し、直接拝顔した事はなく、只、在職中、同僚であった原子力研究所の中村勝一氏から、気さくで、ひよっこり研究室に来て、話し込む人で、或る時、「ブラジルに分校か一大農場を造る構想の話がされた」など、話を彼から聞いていた事と、奇想天外、逸早く原子炉を導入したなどは、まさに湛山と同様、気宇壮大な気概が取り持つ縁かと思つて執筆を始めた。ところが、上記の如き気概の直接交流を知った。(8) このブラジルの件は資料「学ぶころ」の元学長景山哲夫、「前総長を回想する」にも見られる。(9) 冒頭で引用した堀田善衛の言葉は裏を返せば、個人的実績とか業績の評価でも、現実には絶対はなく、作用と反作用は相伴っており、一将功なり万骨枯るの如く、反作用の評価も考慮すると、一般に枯れた段階の歴史的評価は相殺され無に帰する。歴史的評価までの途中での評価はその時点の消長の過渡的評価に過ぎない。この様な評価よりも、山路愛山(評論家)の言う人間の生き様を述べる方が余程現代人の為になるとの覚めた考えにあらう。総長の人生観は正しくこの覚めた考えから、有形の褒章、勲章には淡白で、無形の社会的公正と自己に忠実な自由の精神を生甲斐とした洗心にあつたと言え(10)。

さて、財産には、自然と人為の両面があり、自然の方は複雑で、さて



洗 心

置き、人為はその生産、発案者に帰属する。この観点から、両者は峻別されるべきだが、日本人はこの点には無頓着である。従つて、個人の成果は個人に帰属すると言う個人中心主義に疎い。だが、彼は、資料にある如く、(11) 褒章の候補者に推薦されても、これは周囲の自分を支えた者への受章との念で受け、代表者と考えている。この謙虚な考えは無形遺産として上に立つ者は継承すべきであらう。日本では、組織全体主義の因習から、個人の成果でも帰属は組織の長に黙認し、出る杭は打たれる悪しき慣習が未だ見られる。

詳細は知らないが、売春防止法案反対の観点も、個人中心で、個人の人格尊重と衣食足つて礼節を知るための生活水準の経済的環境整備が行政の本質であるとの心の広い本音であつて、建前の法案では時期尚早との反省的反対意見と考えられる。(12)

総長の自然尊重の精神から上記の様な事物を客観視する自然合理主義精神(13)の心眼教育と共に、諸々の反人道的社会現象は特に貧困とその格差に由来し、この解消には経済力発展、強化が重要との観点から、水産資源に着目し、その開発の研究所を設立し、魚類養殖の開発、更には、原子力の利用に係る教育、訓練、研究の推進に率先、原子力研究所を設立し、原子炉を導入され、適材適所の陣頭指揮で発展の基礎を築かれた。(14) 特に、クロマグロの卵からふ化した稚魚の成育のノウ・ハウと言

う未知の研究成果を挙げ、今日では、この業界の不動の地位を確立している。今日、自由化のグローバルイズムの潮流のなかで、私学経営の自立的運営費は背水の課題となつている事を考えると、既に半世紀も前に、この将来を見通していたと思われる。この先見は言葉よりも行動力で稀有と言える。

日常生活に於いて、邪悪と言え、平気で嘘をつく事と機会均等で無い事が先ず上げられる。前者は心眼教育により事物を客観視する精神的発達に抛り防ぐことが可能である。この視点からは暗記模倣の教育は、記述の通り、邪悪である。後者は近代的競争は、前提が同質同等の能力が横一線に並んだ出発の競争であり、敗者復活が可能な社会雇用制度が要求される。競争には、より多くの参加の機会を与えることは社会的使命であり、彼は私学では最も低い授業料を措置した。(15) 更に、民主主義はNo.1ではなく、多くのonly oneがその本質を支えるとの見識が資料から伺える。

注釈と解説

元建学史料室長

當仲 將宏

(1)「心廣体胖」(ココロヒロクシテ タイユタカナリ)は世耕総長が亡くなる年のはじめ、体調芳しからず、今まで欠席したことになかつ

た卒業式での総長訓辞があやぶまれたため、この色紙を書き印刷して、卒業生全員に贈ったものである。中国の古典四書の「大学」から引用したもの。これに一步深め心眼を加えた「心眼廣体胖」とそのいづれかに、校歌を入れた当時出はじめのソノシートも添えて贈った。「炎の人生」103頁。

「遺墨集」25頁。

(2)岸内閣で経済企画庁長官に就任したとき、国会冒頭に行われる総理大臣の施政方針演説のほか、財政・外交・経済演説があり、自分の経済演説の原稿の中にあつた、官僚が作った「後進国」という用語は、相手を見下げた言い方で好ましくないとして修正を指示されたこと。「結局今日では「低開発国」から「発展途上国」に変わり、世耕先生はすでに十年前に、今日の南北問題についての感覚をもっておられたわけで頭が下がります」と当時の大臣官房が述べられている。「炎の人生」50頁。「学ぶころ」153頁。

(3)政治家世耕弘一は選挙民に説教したりするので、選挙は下手であった。理由は選挙民におもねることなく、頭ひとつ下げることすらない。陳情に訪れた市長村長などへの対応でも、「地元も大事だが、優先すべきは先ず国だ。国家あつての地元だろう」と正論をずばりこのようなことで選挙に強いわけがない。「炎の人生」50頁。選挙

運動について「洗心の人」54頁、86頁。世耕の選挙は権力との戦いであつた。政治家生活を通じて八勝五敗が総選挙の成績であつた。

(4)「不倒館」は世耕弘一の建学に関する史料を収集、保存、展示しているもので、この論文に関連する資料の主なものには「回想世耕弘一」「回想世耕政隆」「学ぶころ」(入学・卒業式の総長訓辞、回想世耕弘一の中から抜粋した著名人や大政翼賛会の回想記、世耕弘一小伝、冊、木彫り、銅板など収録。「大政翼賛会に抗した40人」(著楠精一郎)「山は動かさず」(小説、漫画)「洗心の人」「不倒館ものがたり」(不倒館に関するパンフレット類)等々。

(5)世耕弘一が世に残した墨筆を建学史料室が縁故ある多くの方々呼びかけて収集したものは「遺墨集」に収録しているが、展示室に掲額されていらない実物の横額、掛け軸、色紙などは、同室の特設ケースに保存している。本学で講演のため来訪されたある有名な女流書家は、世耕弘一の書を見て「西郷隆盛の「敬天愛人」を思い起させ、肉付きが重厚で力強さ、たくましさを感じ、男気がある。」とコメントされていた。(なお、堀部氏論文の表題に「自然主義的人間愛(敬天愛人)」とあるが、これは上記

書家の書評とは無関係に書かれたものであり、全く偶然であつたことを付記します。)

(6)日本自由党、大政翼賛会に対峙、同好会の結成、隠退蔵物資の摘発、石橋湛山に関する事項は、「学ぶころ」251頁から262頁。「炎の人生」34頁から46頁。日本自由党は鳩山一郎らが作った政党であつたが、鳩山が追放になり多くの同志が党を離れて行く中、鳩山が復帰するまで「日本自由党」の看板を反骨の精神で守つた。「炎の人生」47頁。「学ぶころ」の鳩山薫の世耕さんのおもいで(129頁)より。

(7)総長が尊敬し師事した三人の政治家とは、尾崎弐堂(行雄)、「遺墨集」50頁)鳩山一郎(51頁)石橋湛山(52頁)である。

(8)総長は大学にきて時間があればよく学内を巡視し、通りがかりの研究室などに立ち寄り、中で研究している教員に、「頑張っていますね」と気さくに声をかけられることが、しばしばあつたと当時在職していた人々が語っている。総長が大学に来ているとき、誰でも話をしたいときは訪ねてくるようにと、別館屋上に校旗を揚げた。このように多くの教職員に直接会つて交流することを望まれていた。(9)ブラジルに分校を作るといふ話は「炎の人生」91頁。「学ぶころ」175頁。

(10)「洗心」といふ文言がよく揮毫に

出てくるが、総長がこの言葉を好んで用いられるのは、学生生徒が将来どのような偉い人になつても、優れた知識を誇るだけでなく、心温かく、謙虚な姿勢を持ち、ひたすら人間を磨いてほしいという願いを込めた二文字である、近畿大学の建学の精神の一つである「人格の陶冶」のよりどころとなつている。

(11)褒章の受章時の認識は「学ぶころ」112頁に藍綬褒章受章祝賀会の挨拶によく表れている。大臣候補になつても特に意に介さなかつたり、ときには同僚を推すなど名利に恬淡(平然)な硬骨の政治家であつたと多くの人が評している。鳩山内閣の法務大臣候補や岸内閣の経済企画庁長官拝命時の状況などは「回想世耕弘一」の155頁ほか。「学ぶころ」の263頁。「炎の人生」98頁。「洗心の人」91頁。

(12)売春防止法については、「炎の人生」50頁。「洗心の人」33頁。

(13)総長の自然尊重の精神は、数ある揮毫のなかにも見られる。「自然之道以為實」「遺墨集」13頁。また、世耕は鳩山を師と慕つていたが、鳩山さんが正月の門松の飾りは虚礼であり、廃止すべきだと新生活運動を主張したとき、世耕は「潤いのない無味乾燥な生活は人間の生活ではない。都会にしか住んだことのない人の発想で、門松を売って生計を立てている人がい



自然之道以為實

ることや、繁った松を切ることに
植樹法にかなって見落
とした、全く山村の生活を知らな
い者の単純な理屈である。」熊野
の山村で育った世耕ならではの批
判である。

(14) 水産資源開発のための研究所設立
と原子炉の設置については、実学
教育推進の象徴として「炎の人生」
64頁から78頁。

(15) 低い授業料の設定については、現
在の教職員や学生にはそのような
認識は薄いかと思われるが、昭和
五十年ごろまでの近畿大学の授業
料は、全国平均以下であった。そ
れは総長が「私の理想はすべての
人々が大学を卒業するということ
です。大学教育が国民にとって普
通教育と同じになる。そうなっ
てこそわが国は、はじめて世界にそ
の存在を発揮できると思います。」
開かれた大学をかけた大衆路線を
歩み、「学びたい者には学ばせた
い」という理念のもとに、授業料
も最も低く設定していたため、設
備改善には充分手が回らなかった
ことも、また、教職員の給与が低
かったことも事実であった。昭和
三十四年の入学式で総長は「本日
の入学生は二千五百人ですが、数
年後には一万人の新入生を迎え入
りたい」と述べている。

【編集部追記】
「注釈と解説」2005年

この堀部治氏の本論文は「不倒館」にある幾つかの資料に目を通された後、評論されたものであります。読者の中にその元になる内容が承知されていない方もおられることから元建学史料室長の當仲将宏（元附属高等学校・中学校校長）が、堀部治氏に快諾を得たうえ、この「注釈と解説」を補注いたしました。参考になれば幸いです。

なお、筆者堀部治（ほりべおさむ）氏は、元理工学部（原子炉工学科）教授で、昭和四十年四月から、平成七年三月まで在職されました。世耕弘一の人物論の多くは、回想記などで見られるが、直接面識のなかった堀部氏が書かれた世耕弘一論はまことに貴重なものであります。ご寄稿ありがとうございます。

創立五十周年を迎えて

附属豊岡高等学校 校長

藤原 健一

本校は昭和三十九年、生徒急増期、高度経済成長に伴った高等学校進学率の上昇期に、地元での熱烈な誘致活動の期待に応え、という形で、近畿大学創設者世耕弘一先生の英断により兵庫県北部唯一の私立女子高等学校として誕生しました。

開校に当たり世耕弘一先生は人格形成を強く望まれ、入学式において、「近畿大学の高等学校はどういう教育方針かと申しますと、『心の美人』をつくることと申します。心を中心として、孝行、行儀、作法も心の現れでなくてはならない。心は形をつくり、形は心を整える。まず、人



開校を祝うゲート 昭和39年4月 C棟前



第1回入学式 昭和39年4月8日 世耕弘一総長訓辞

から愛され、その上で豊かな教養と学問が身に付けば、当然ながら周りからも信頼され尊敬される。人格という器に学問を詰め込む。」と述べられております。

この教学の方針が附属学校の近畿大学の建学の精神である「未来志向の実学教育」と「人格の陶冶」を基本に、「人に愛される人、人に信頼される人、人に尊敬される人」を育成することを教育の目的として掲げております。

本校もその教育の理念に基づき「知・徳・体・感の調和のとれた全人教育を推進することにより、生徒の豊かな人格形成を図り、将来、社会・人類の発展に貢献し得る優れた人材の育成」を目指しております。

五十年を振り返ってみますと、昭和六十二年には文理コースを設けて男女共学とし、校名を現在の近畿大



第1回入学式 昭和39年4月8日 豊岡市民体育館

学附属豊岡高等学校としました。更に平成八年には近畿大学附属豊岡中学校を開校し、平成十一年には中高一貫コースを新設しました。現在では、県下でも有数の進学校として地域でも一定の評価をして頂けるようになりました。ここに至るまでは、法人本部のご支援とご指導、歴代校長先生を始め先輩先生方のご努力により、現在では志願者も但馬・丹後を始め、県下一円、更には県外からも応募してくるといふ学校に発展しました。

卒業生も一万人を超え国内外の各方面で活躍しております。これはひとえに本校教育の充実発展のため、温かいご理解とご支援を賜りました学園関係者の方々を始め、地域、校友会、そして卒業生の皆様の多大なご貢献の賜と衷心より感謝申し上げます。

五十周年の節目を迎え、今後私学を取り巻く教育環境は非常に厳しい状況が予想されます。改めて私学としての特色を一段と鮮明にし、「建学の精神」を教育の理念とし、「人に愛され、人に信頼され、人に尊敬される人」を育成し社会に貢献できる人材に育成が責務であると考えます。

今後も、保護者、同窓会、地域の皆様の期待に応えるべく、愛され信頼される学校づくりに、情熱と愛情をもって邁進する決意でございます。

附属小学校 創立六十周年を迎えて

附属小学校 校長

中川 京一

附属小学校は昭和二十九年四月、初代総長の世耕弘一先生が理想的な総合学園を完成させようという大きな教育目標に基づき、幼稚園から大学・大学院に至るまで、一貫した理想の教育を実践することを目的として創設され、今年創立六十周年を迎えました。

世耕弘一先生の建学理念「教育の目的は、人に愛される人、信頼される人、尊敬される人を育成することにある」をもとに、「健康教育」「道徳教育」「英知教育」に重きをおいた全人教育を行ってきた本校は、創



旧校舎での朝礼のようす

立当初、まわりにまだ田園風景が広がる東大阪の町で「優秀児の特別教育」を標榜し、私学ならではの特色ある教育を期待されました。とりわけ、挨拶や礼儀作法などへの厳しい指導は近隣の方々から「道徳学校」と評されるほど、人格を育てることが重んじられていました。

また、実地に体験することを重視した教育活動として、一年生から学年で宿泊行事が行われ、三年生が行う吉野学舎は昭和三十一年から続けられていきます。本学園の建学の精神である「実学教育」と「人格の陶冶」の実践は連綿と続けられてきました。

旧校舎の一部老朽化と、関西圏における私立小学校増加に伴う競争激化に対応するため、小学校は附属幼稚園と共に平成二十二年四月、旧あ

やめ池遊園地跡地に移転しました。あやめ池の畔に残る自然を生かした緑のキャンパスで、近鉄奈良線菖蒲池駅の目の前という利便性を生かし、現在は六十年の伝統を大切にしながらも、新しい教育活動に取り組んでいます。

中でも重視しているのが、大学と連携した本校独自の教育プログラムです。奈良病院の見学（医学部）、芋ほりの実施（農学部）、法廷教室での模擬裁判（法学部）、狂言鑑賞会（文芸学部）、おくすり教室（薬学部）、サイエンス教室（理工学部）、水産研究所・原子力研究所の見学などを教育カリキュラムの中に位置づけることで、本校独自の教育活動を実践しています。昨年からは五六年生が自らの進路進学を考えるために、大学本部の協力を得て、大学見



第一期生入学式で訓辞を述べられる世耕弘一先生
昭和29年4月12日



今年で5年目を迎えるあやめ池キャンパス

学（東大阪キャンパス）を行っており、近畿大学が社会に果たしている役割を実地に学びながら、自分たちの将来について考える機会としています。

私立小学校の競争は激しいものではありますが、新しく整った環境と、総合大学である本学園にしかできない唯一無二の教育活動を生かしながら、一層の発展充実を図っています。

不倒館を訪れた方々

本学総合社会学部（環境系専攻都市・まちづくりコース）の学生が、東大阪G地域まちづくり井戸端会議を中心に知り合った方々（ひまわり倶楽部）を対象に、キャンパスツ



ひまわり倶楽部の皆さん



川嶋誠氏（右）と令嬢の寿里亜さん

アーを企画。平成二十六年五月十三日、地域サポーターの方を含め、ひまわり倶楽部二十六人の皆さんが訪問されました。

「近畿大学近隣に数十年も住んでいるながら、大学のことはほとんど知らなかったので、いい機会になりました。」と好評を博し、早くも第二弾を企画されています。

平成二十六年六月十三日、本学校友会アメリカ・ロサンゼルス支部の川嶋誠氏（米国法人 MAKOTO AUTOPARTS CORPORATION 代表取締役）が、令嬢とご一緒に来館。生まれも育ちもアメリカで、近畿大学には初めて訪れたという令嬢の寿里亜（Julia）さんと、世耕弘一先生の書や勲一等瑞宝章佩用のモーニングなど興味深く見学した後、人力車で記念撮影。

川嶋氏は、法学部経営法学科を昭和六十三年三月にご卒業。現在は、ロサンゼルス支部幹事長の重責を担っておられます。

川嶋氏のロサンゼルスからのメッセージを次にご紹介します。

「このたびの母校訪問は、娘の寿里亜にもいい刺激になったようで、日本で暮らす選択肢も将来あることを話し合うきっかけにもなりました。近畿大学を訪れた後の附属高校バスケットボール部の集いでは、恩師の溝辺先生をはじめ先輩後輩を含め十五人ほどが集まり、タイムスリップして楽しむことができました。当地の友人にこのことを話すと本当に幸せなことだと指摘を受け、改めてハツとしている次第であります。」

建学史料室からのお願い

▼史資料収集

世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生
ご生前の関係史資料（出版物、書簡、
写真、録音テープ、ビデオ、その他
何でも結構です）を、現在もお手元
に保管されている方々に、その関係
史資料のご寄贈又は複製でのご提供
を賜りたく、当史料室では広く皆様
方にご協力をお願いしております。
詳細につきましては、史料室へご
一報いただければと思います。

▼ホームページ

不倒館の開館日・時間は、近畿大
学ホームページ「不倒館 | 創設者世
耕弘一記念室 |」のサイトでお知ら
せしております。

近畿大学ホームページのトップ右
下にある（不倒館 | 創設者世耕弘一
記念室 | 立像の画面）を選択してく
ださい。

▼ご意見・感想お待ちしております

本誌や不倒館ホームページへのご
感想やご意見をお寄せください。

お寄せいただいたお便りについて
は、今後の本誌などの編集に役立て
させていただきます。また、こちら
からお問い合わせをさせていただく
場合や、広報誌の中でお名前ととも
にご紹介させていただくことがあり
ますので、あらかじめご了承ください。

お問い合わせ先

〒五七七-八五〇二
東大阪市小若江三ー四ー一
近畿大学 建学史料室
電話（〇六）四三〇七-三〇九一
（ダイヤルイン）

URL <http://www.kindai.ac.jp>

不倒館入館者数の報告

平成二十一年九月に開設以来
の不倒館入館者数を年度別で報
告します。

平成二十一年度	一九五一入
平成二十二年度	二四四六入
平成二十三年度	二五七九入
平成二十四年度	二九七一人
平成二十五年度	四一七二人
平成二十六年 八月末	二〇五九人
総数	一六一七八人

本誌「A Way of Life」が
近畿大学ホームページでもご覧いただけます

建学史料室の広報誌「A Way of Life —Seko Koichi—」が、このたび、近畿大学ホームページからご覧いただけるようになりました。

近畿大学ホームページのトップ右下にある「不倒館 | 創設者世耕弘一記念室 |」を選択いただくと閲覧ができます。

また、「近畿大学について」→「初代総長（世耕弘一）の魂にふれる」からでも閲覧可能です。

現在は、第18号と平成二十六年三月発行の第17号を掲載しております。

不倒館開館日時のお知らせと併せて、ぜひご覧ください。